

資料

ブラッドフォード・スミスの「レイプ・オブ・南京」

東中野 修道 編訳

ブラッドフォード・スミスの「レイプ・オブ・南京」

日本文化は借用と模倣のコピー文化ではない。外来の漢字に日本独自の訓読みをほどこし、漢字から仮名文字を作り出したことにより漢字よりも高度な文字表現を発展させた、という一事からも窺えるように、外来のものを全て採り入れたのち少量の貴重なエッセンスだけを取り出す日本文化は、西尾幹二の名著『国民の歴史』に倣って言えば「外^{ぐわい}のものを貪婪^{どんらん}に取り入れ……自分流に変形して再創造」する文化であった。クロード・レヴィ・ストロースの言葉を以て言えば、「借用と総合」の文化、「混合と独創の文化」であった。日本文明はハンチントン教授も言うようにシナ文明ともヒンズー文明とも異なる独自の文明なのである。⁽¹⁾

確かに、聖書に匹敵するような宗教作品はない。全知全能の唯一絶対神ヤーヴェエヤイエス・キリストとの契約も心中の事実としては存在しない。それゆえ日本人はクリスチャンでもないかぎり聖書の言葉を倫理的規範とすることはない。

それでは日本人には倫理道徳がないのかと言えば、日本の夜は女性が一人でも歩けるほど治安がよい。平成七年（一九九五年）の阪神淡路大震災の折りもカリフォルニア地震や四川大地震（二〇〇八年）とは違って、暴動も掠奪も起きなかった。平成二十三年（二〇一一年）の痛ましい東日本大震災の折りも、死者二万人以上という甚大な被害

にもかかわらず、被災地の秩序は正しく整然と保たれた。一瞬にして愛する家族と家屋財産が津波に奪われながら、被災者は自制心を失うことなく互いに助け合った。私より必要とする人に非常食はあげてくださいと仮住まいの中で譲り合った。無言で、底知れぬ苦痛に耐える被災者の姿に、世界中が驚き、フィナンシャルタイムズは「日本の奇跡は終わらない」と書いた。フランスのある政治学者は「西欧文明にはない集団的な規律、運命とそれへの抵抗、他者への配慮をあわせたユニークな遺伝子配列」と表現した。⁽²⁾ 聖書はなくとも日本人のユニークな、西欧文明にはないDNAだと言うのである。

勿論、今も昔も真逆の日本文化論は多い。今から七十三年前の真珠湾攻撃の直後に書かれたブラッドフォード・ミス（一九〇九―一九六四）の日本論もそうで、日本の軍部は借用の文化に由来する国民的な劣等感を軍事的な完勝で覆い隠し、日本精神に寄せる国民の誇りに訴えようとしていたと言う。

スミスによれば、日本精神は時代錯誤の精神であった。そのような断罪は、彼我の神観念の相違に坎するスミス

の認識の欠落から始まる。「彼らはこの世から立ち去った人々である。この世を去った人々を神として考えよ」(They are men, who have departed from this life:—consider them divine beings.) と、古代ローマの哲学者にして政治家のキケロが述べたのと同じ意味で、日本人は古来から死者も生者も動物も大自然も「尋常ならずすぐれたる徳のありて、可畏き物を迦微とは云なり」(本居宣長『古事記伝』三) とみなしてきたが、この「神」を、スミスは全知全能の唯一絶対神「ゴッド」に照らし合わせて解釈する。そして日本精神は神々の建国した帝国への忠誠を意味するという神道と、「神聖にして全能の神支配者」(the divine and all-powerful god-ruler) たる天皇への盲目的な忠誠を要求するという皇道と、そしてまた忠誠と服従という徳目を称賛するという武士道、——この三位一体から成り立っていると言うのである。後の東京裁判でも「六合を兼ねて以て都を開き、八紘を掩ひて宇と為むこと、亦可からずや」(日本書紀卷三) という吾が国建国の理想を世界征服の思想だとは立証できなかったにもかかわらず、それゆえ日本人にはヒトラーのような世界制覇の意図がなかったにもかかわらず、日本はこの八紘一字の思想に立って全世界を神々の

統治する日本の領土とするために戦っていると言う。それが日本民族の理想であり世界的使命だという軍部が、日本精神を鼓吹し、軍国主義を推進しているから、そこには精神の解放もなければ理性の啓蒙もない。それどころか東アジアにおける銃火の異常発生の震源にはかならない。そのため個人としては最も礼儀正しく最も洗練された日本人なのに、軍隊に入るや、野蛮人に転じる。それゆえ東アジアの癌である軍部と、軍部の支配を可能とした憲法を起訴し、有罪宣告を下さねばならない、と言うのである。

アメリカの雑誌『アメレイシア』⁽³⁾一九四二年三月号に発表されたこの「日本精神」に続いて、スミスは「日本——美と獣」を一カ月後の『アメレイシア』四月号に発表した。そこに「レイブ・オブ・南京」という言葉が三度も出てくる。南京陥落から半年後の一九三八年六月に、南京のジョージ・フィッチ師がアメリカ講演の途中サンフランシスコで「レイブ・オブ・南京」⁽⁴⁾について講演し、次いで首都ワシントンで各界要路の人々に「南京フィルム」を上映しながら語っていたから、それを典拠としてスミスはそう表現したのであろう。

ともあれスミスの「日本——美と獣」によれば、日本人

は家父長の命令に黙々と従い、天皇に服従し、自らを神々の子孫と称し、地球上で唯一神聖な民族と自任して、日本人以外を野蛮人と見下すと言う。一九三八年（昭一三）三月ユダヤ人に欧米各国が門戸を閉ざすなか、世界で唯一日本軍は約二〇〇名のユダヤ人に門戸を開いて満州里に迎え始めたのだが、⁽⁵⁾スミスによれば、神聖な皇道の実践こそ世界に平和と繁栄をもたらす唯一の道だという日本人には人類愛がなかった。個人尊重の個人主義もなかった。生命尊重の念もなかった。それゆえ他民族に対しては獣のように行動する。そのうえ悪いことには、日本人には聖書という宗教作品がないから、善と悪、罪と罰、最後の審判という人間としての基本的な問題意識がなく、家族と国家にたいする忠誠意識しかない。そのため日頃は隠忍自重していても、突如自分が自由だと分かると、自制心を失って剥き出しの感情を爆発させる。こうして南京が陥落した時それまでの軍事行動のもとで抑圧されていた日本軍兵士の禁欲が解禁され、剥き出しの欲情が爆発することとなった。勤勉で、清潔で、辛抱強く、礼儀正しく、家庭を愛し、自然と芸術にたいする感性豊かな美の感覚を有する日本人が、かくして史上最も残忍な大量殺人を犯してしまったと言う。

「日本軍は家に押し入り、泣き叫ぶ赤子の胸に銃剣を突き刺し、それを止めようとした息子や父を殺し、それから母と八歳の娘を裸にしてレイプしてから無慈悲にも死に至らしめた」

枝葉末節の異同を横に置けば、これは所謂「南京フィルム」⁽⁶⁾とその説明文を初出とする説明にほかならない。それゆえスミスは、中華民国政府軍事委員会顧問のフィッチ師から國務省政治顧問のスタンリー・ホーンベックに渡った南京フィルムとその説明文を基に、そう書いたと言っている。残敵掃蕩のために陥落後の南京城内に入った日本軍は金沢第七連隊の三千人でしかなかったが、スミスは南京城内に五万の日本軍が解き放たれ四万二〇〇〇のシナ人を殺したと言うのである。

それから凡そ七十年。研究の進展により、私たちはスミスの四万人虐殺説の典拠を辿ることができる。その四万という数字は、スミスの日本論の数ヶ月前に出たエドガー・スノウの『アジアの戦争』（一九四一）を典拠としていた。スノウは、マイナー・ベイツ中華民国政府顧問が一九三七年十二月十五日までに脱稿した「陥落二日間の記録」の四万人虐殺説を典拠としていた。⁽⁷⁾ ベイツ南京大学教授の「陥

落二日間の記録」は、国民政府軍事委員会に直属する国際問題研究所（CIA）が監修する『新要約 日本人の戦争行為』（一九四一）など五冊の英文宣伝雑誌に転載されたが、そのなかの肝心要の四万人虐殺説だけは常に抹消（否定）されていた。⁽⁸⁾ シナ事変一周年にハロルド・ティンバリー編『戦争とは何か』（英語版）とその漢訳版の『外人目撃中の日軍暴行』が同時出版され、共にベイツ教授の「陥落二日間の記録」を再録したが、やはり漢訳版は四万人虐殺説を削除していた。事情通の多いシナ大陸で南京虐殺を言えば、それがたちまち嘘とばれて、せつかくのプロパガンダが水泡に帰することを恐れたからである。⁽⁹⁾ 南京虐殺は国民政府軍事委員会と国民党中央宣伝部の放ったアメリカ向け欺瞞宣伝（プロパガンダ）だったのである。

シナ軍の「最高統率機関」たる国民政府軍事委員会が常に四万人虐殺説を否定し、ベイツ教授が常にそれを追認していたことを、読者は訝しがるかも知れない。それはしかし何の不思議でもなかった。蒋介石にしろ毛沢東にしろ、南京の欧米人の国際委員会にせよ国際都市上海の外交官や英文雑誌にせよ、南京虐殺を公言したことは一度もなかった。⁽¹⁰⁾ 戦後盛んに宣伝される戦争捕虜（POW）の不法殺害

にしても、そう口にした人がいたであろうか。日本軍の大量無差別殺人を南京陥落二カ月後の二月十日の日記に記していたジョセフ・グルウ駐日アメリカ大使の強い意向が働いたのであろう、東京のアメリカ大使館のキャーボット・コーヴィルが南京を訪問した。実地調査のためであった。そして五月二日の日記にこう総括していた。

「南京の安全地帯はある程度勢力争いの問題（訳注、そこを聖域視する欧米人とそこを自軍の権力下に置いて名実共に百パーセントの南京占領を実現しようとする日本軍の勢力争いの問題）であったが、しかしとにかくその位置は申し分のないほどよかった。それとは反対に重大な事態はシナ兵が安全地帯を尊重しなかったことだ。多くは軍服を脱ぎ捨て、そこに避難したのであった」⁽¹¹⁾

コーヴィルは大使館付き海軍武官であった。軍人として、軍服を脱ぎ捨てたシナ兵が戦争捕虜（POW）として遇されない不法戦闘員であることは百も承知であった。それゆえ安全地帯における重大な事態は日本軍の合法的な不法戦闘員処刑の事態ではなく、シナ兵が軍服を脱ぎ捨てたという前代未聞の醜態であった。非武装中立の安全地帯に逃げ込んだことであった。兵民分離という交戦法規の大前提が

自壊してしまったのである。大虐殺主張派はこの重大な記録を自説に都合の悪い事実として翻訳の際に排除すること⁽¹²⁾で、その存在それ自体を読者に知らせようとはしなかった。真珠湾攻撃の半年前に、すなわちスミスの日本論の出る数ヶ月前に国民党中央宣伝部は、極秘文書の『中央宣伝部国際宣伝処工作概要』を編纂した時、漢訳版『外人目撃中の日軍暴行』をこう論評したのも当然であった。

「この本は英国の名記者田伯烈^{テイ・スリ}が著した。内容は、敵軍が一九三七年十二月十三日に南京に侵入したあとの姦淫、放火、掠奪、要するに極悪非道の行為に触れ、軍紀の退廃および人間性の墮落した状況についても等しく詳細に記載している」⁽¹³⁾（傍点筆者）

政治権力による針小棒大な拡大宣伝を棚上げして言えば、ここにいの一番に記載されるべき「虐殺」「屠殺」「殺人」の二文字が見当たらない。南京虐殺という認識など誰にもなかったという所以^{ゆえん}である。

しかしそのように判明したのはここ十数年の研究による。それゆえブラックプロバガンダとも知らずに飛びつく人がいても戦時下なればこそ無理からぬことであった。当然、罪と罰、最後の審判というキリスト教の絶対的な原理原則

からすれば、この史上最も残忍な「レイプ・オブ・南京」の罪は（松井石根司令官の名前こそ挙げられていないが）軍部が負わねばならない。「私たちが忘れてならないのは軍国主義者だ」と最後に念を押すスミスは、神道や皇道や武士道といった過去の原始的な日本の怪物にトドメを刺して、明日の日本を建設するチャンスに自由主義者に保証せねばならない、そのためには何ができるかと記して、「日本——美と獣」を結んでいる。

真珠湾攻撃から約半年後の一九四二年六月十三日、ルーズヴェルト大統領の大統領命令九一八二に基づいて戦時情報局（Office of War Information）が創設された。その時スミスが中部太平洋作戦本部（Central Pacific Operations）の部長に指名される。そしてパンフレット作成などのプロパガンダ戦を、九十人の専門家や執筆陣を率いて、日本の敗戦まで陣頭指揮した。終戦後はいち早く昭和二十年（一九四五年）九月七日に横浜に上陸し、GHQの民間情報教育局（CIE）企画作戦課（Plans and Operations Section）の初代課長となった。¹⁴あの有名な『太平洋戦争史』（中屋健次郎、高山書院）こそスミス課長の率いる民間情報教育

局企画作戦課が急遽出版したものであった。今日でも印刷製本には三カ月を要することからすれば、訳者が前書きを書いた昭和二十一年一月の初旬には邦訳と厳密な訳文検査が完了していたことであろう。『太平洋戦争史』は昭和二十一年四月二十八日のA級戦犯二十八人の起訴状発表と五月三日の極東国際軍事裁判開廷に間に合うよう、四月五日に出版され、六月十日には再版が出た。

二十世紀最大の出来事は複数の外国の世論調査によれば広島長崎への原爆投下であり、一夜にして十万人以上を焼き尽くした三月十日の東京大空襲を凌ぐ、史上最大の戦争犯罪であったが、『太平洋戦争史』は南京で「近代史最大の虐殺事件」が起きたとして日本軍を断罪する。

「日本軍は恐る可き悪逆行為をやつてしまつた。近代史最大の虐殺事件として證人達の述ぶる所によればこのとき実に二万人からの男女子供達が殺戮された事が確證されてゐる」¹⁵

これが二万四万という数字の異同を別にすれば史上最も残忍な大量殺人事件の告発であった。そしてスミス課長の『アメリカ』における予告通り、「過去の原始的な怪物が再び擡頭しないよう」、南京占領時の最高司令官が起訴

された。昭和二十一年七月二十五日から南京虐殺の審議が開始され、昭和二十三年十二月二十三日の皇太子殿下（現今上^{きんじょう}天皇）お誕生日に「レイプ・オブ・南京」の責任者としての松井石根^{いわね}大将を含む七人が絞首刑に処せられた。

ピュリッツァー賞受賞作家のノーマン・メイラーが言うように、アメリカ人は広島長崎への原爆投下という「予告なしの絶滅」と「深遠なまでの心霊的ショック」を今も昔も直視できないでいる。¹⁶ アメリカという国家の過ちを直視しなくても済むよう、南京虐殺が「史上最も残忍な大量殺人」「近代史最大の虐殺事件」として東京裁判に起訴されたのである。その起訴の中心的人物こそ、真珠湾攻撃の直後から逸速^{いちすく}く「レイプ・オブ・南京」を主張してきたGHQの民間情報教育局（CIE）のスミス企画作戦課長であった、——と直接裏付ける資料はないが、かかる脈絡からそう言うては言い過ぎなのであるうか。

註

- (1) 西尾幹二『国民の歴史』、文春文庫、平成二十一年、五九頁、七一頁。クロード・レヴィストロース『混合と独創の文化——世界の中の日本文化』、『中央公論』昭和六十三

年五月号、七四頁。サミュエル・ハンチントン『文明の衝突と二一世紀の日本』、鈴木主税訳、集英社新書、一一八頁。

- (2) 『産経新聞』平成二十三年四月二十五日。

- (3) 一九三三年に創設された国際共産党の外郭団体「アメリカのシナ人民友の会」(American Friends of the Chinese People) はニューヨークで月刊誌として『今日のシナ』(China Today) を出版していたが、それが一九三七年からは「アレイシア」(Amerasia) に代った。トーマス・ピッソン、フィリップ・ジャフェ、フレデリック・ヴァンダービルト等が両誌の創刊にかかわったのだが、ピッソンは「アメリカのシナ人民友の会」の中心メンバーにして中国共産党の熱烈な擁護者であり、ソ連軍諜報機関GRU(参謀本部情報総局)のスパイであった。ジャフェもソ連の諜報部と深い関係にあった。ヴァンダービルトは戦後ソ連のスパイとして名指しで告発された。以上については、一九三〇年代から四〇年代にかけてソ連が仕掛けたアメリカの軍事・外交・科学技術にかんする恐るべき諜報活動を解明したヴェノナ作戦にかんする最良の著作『ヴェノナ——解読されたソ連の暗号とスパイ活動』(ジョン・ヘインズ／ハーヴェイ・クレア著、中西輝政監訳、PHIP研究所、平成二十二年) 四七五頁、四八一頁はかを参照のこと。

- (4) W. Plumer Mills, Letter to Nina Mills, June 12, 1938, in W. Plumer Mills Papers, China Records Project Miscellaneous Personal Papers Collection, Record Group No.8, Box 141,

New Haven: Yale Divinity School Library.

- (5) ハルピン特務機関長の樋口季一郎少将がナチスから追われた多数のユダヤ人難民を救って戦後イスラエルの「ゴールデンブック」に記載されたことについては、樋口季一郎『アッツキスカ軍司令官の回想録』（芙蓉書房、昭和四十六年）三六三頁。一九三八年（昭一三）から一九四一年（昭一六）までに一万八〇〇〇人のドイツ系ユダヤ人と四〇〇〇〇人のポーランド系ユダヤ人が満州里を経由して脱出したことについては、伊藤明「ユダヤ難民に〈自由への道〉をひらいた人々」上下（『観光文化』一五〇号一五一号、平成一三年一月、平成一四年一月 日本交通公社）、その英文版（出版年不明）の Ito Akira, *The Path to Freedom: Japanese Help for Jewish Refugees*, Tokyo: Japan Travel Bureau (Foundation) ならびに井上脩／古江孝治『人道の港 敦賀——命のビザで敦賀に上陸したユダヤ人難民足跡調査報告』（日本海地誌調査研究会「敦賀」、平成十九年）を参照のこと。
- (6) ここで言う「南京フィルム」とは、戦後「マギー撮影フィルム」という意味で「マギーフィルム」と称されてきたフィルムのことである。しかし戦前は「フィッチ撮影フィルム」と称されていたことが複数の記録から確認される。フィッチ夫人 (Geraldine Fitch) は南京陥落から二年後の一九三九年七月アメリカ下院外交委員会で宣誓したうえで、「皆様方の中には、南京の劫掠に、かんする私の夫の動画 (my husband's moving pictures on the sack of Nanking) をご覧になった方がいらつしやるでしょう」（傍点筆者）と証言していた。一九三九年の末に南京に派遣され保泰街のフィッチ師宅を Y M C A 会館とした日本 Y M C A の末包敏夫主事と安村三郎主事は、「かれ（注、フィッチ師）は南京虐殺の悲惨さを映画に撮影した」（傍点筆者）と戦前南京で耳にしていた。このような事実関係から本稿では「マギーフィルム」ではなく「南京フィルム」と称している。なおフィッチ師は国民党政府軍事委員会に直属する準軍事組織の「顧問」であった。
- (7) 東中野『「南京虐殺」の徹底検証』、展転社、平成十年、三六八頁。
- (8) 前掲書二八六―七頁、三五七頁。東中野『南京事件 国民党極秘文書から読み解く』、草思社、平成一八年、二〇八頁。
- (9) 前掲書、二〇六頁。
- (10) 東中野『「南京虐殺」の徹底検証』第十四章「〈南京虐殺〉追跡調査」、第十五章「〈南京虐殺〉の全体像」参照のこと。
- (11) Cabot Coville, *A Trip from Tokyo to Shanghai and Nanking and Return, April 16 to May 5, 1938*, p.52, in *Stanley K. Hornbeck papers*, Box 185, Folder 1D; Joseph Grew Correspondence, Hoover Institution Archives, CA: Stanford University. なお、南京安全地帯国際委員会が不法処刑という判断を放棄したこと、ジェップリ英国領事が日本軍

の不法行為を掠奪と報告していたことについては、東中野「南京（虐殺）——第二次国共合作下の戦争プロパガンダ」（東中野編著『南京「虐殺」研究の最前線 平成十五年版』展転社、平成十五年）二八七頁、東中野「再現 南京戦」（草思社、平成一九年）三三六頁を参照のこと。

(12) 南京事件調査研究会編『南京事件資料集Ⅰ アメリカ関係資料編』青木書店、平成四年、一二二頁を参照のこと。

註(11)は翻訳されていない。

(13) 東中野「南京事件 国民党極秘文書から読み解く」、二二頁～二二三頁。

(14) NHK放送文化調査研究所放送情報調査部編刊『GHQ文書による占領期放送年表 昭和二〇年八月十五日～十二月三十一日』、昭和六二年、一四頁。田中英道『戦後日本を狂わせたOSS「日本計画」』、展転社、平成二十三年、一一頁。高橋史朗『日本が二度と立ち上がれないようにアメリカが占領期に行ったこと』、致知出版社、平成二十六年、九六頁。

(15) 『太平洋戦争史（連合軍総司令部民間情報教育局資料提供）——奉天事件より無条件降伏まで』、中屋健次訳、高山書院、昭和二十一年、五四頁。

(16) 「プレーボーイ日本版独占インタビューノーマン・メイラー 戦争の世紀「二〇世紀のアメリカ」(『Playboy』一九九九年十月号、青木富貴子訳) 五二～三頁。

ブラッドフォード・スミス「日本精神」

(Bradford Smith, The Mind of Japan, *Amerasia*, March 1942)

日本軍の飛行機が轟音をあげて太平洋上を飛びかい、真珠湾、マニラ、グアム、ウェーク、ミッドウェイと爆撃したとき、私たちは攻撃に抵抗する準備もなく、事態をはつきりと思い描けないままだった。何年間も私たちは日本人を考えようとはしなかったのである。日本人は古風で趣があった。そして勇気があった。そのうえ予測不能であった。更にまた攻撃的であると同時に残忍でもあった。そして今や卑怯であった。日本人が封建主義から工業主義の帝国に発展するのを注視するとき、つねに日本人にたいする形容詞があった。しかし日本人は遙かに遠くにいて、日本人が私たちを苦しめることになろうとは思ってもしなかったから——どのような形容詞がたまたま流布していたとしても——その形容詞に私たちは納得していたものだ。

そう、私たちは日本人の征服の歴史をかなりよく知っていた。日本が台湾や朝鮮をどう強奪したのか、ロシアと戦争して満州の重要な権益をどのように手に入れたのか、第

一次大戦中に連合国の苦境を奇貨として山東半島や南太平洋に点々と続く島々をどう支配したのか、私たちは知っていた。今ではラブラドル半島の緯度から赤道まで日本の所有は延びていると知ってはいたが、私たちはうっかりしていた。日本が満州とシナ大陸の大部分を乗っ取ってしまったことを私たちは知った。米国内でもカリフォルニアでは日本人が市場向け菜園を相当支配し、ハワイやフィリピンでは多数となっていることを少しは心配していた。

しかし人種的な優越という危険な考えが私たちを麻痺させて、この小さな奴らから絶対危害を加えられることはない^やと信じていた。日本人に咬^かまれても、狂犬ではなく蚤^{のみ}のひと咬みであった。そして日本人について知っていることはあまりよいことではなかったから、それ以上は知ろうとはしなかった。

私たちの過ちが明らかになった以上は今からでもまだ遅くはない。日本の命運を制するものは何なのか、この小さいが荒々しい人種を突き動かす国民思想とは何なのか、日本人に打ち勝つ見込みとは何なのか、それを知ることだ。

というのはこの戦争が進むにつれ、私たちが戦っているのは私たちの国家としての存在から切り離せない^{とみなさ}

れる理想のためだということが、一層明らかとなってきたからだ。そして私たち自身の目的をさらに明らかにする一つの方法は、正確に、私たちが格闘している彼らの思想を知ることだ。ヒトラーの脅威にたいする理解不足は、ヒトラーが説く途方もないごたまぜの社会理論と人種理論をどれほどヒトラーが恐ろしく真剣に信じていたか、そしてその理論に基づいてヒトラーがどれほど狂信的に行動していたか、その点にかんする理解不足を意味した。日本の脅威にたいする理解不足もまた同じ道筋を辿^よる。日本精神は、不幸なことだが、それ以上に遙^{はる}かに危険なまでに病毒を撒^まき散らしてきた。その病害は数千年にわたって組織体を浸食してきたからだ。

では日本人を支配する信念、象徴、制度とは何なのか。いかなるイデオロギーの旗印が日本人を戦場へと駆り出しているのか。自らを人間爆弾として自爆させる、すなわち真珠湾に自殺的な二人乗り潜水艦で忍び込む、ということ^を日本人に納得させているスローガンとは何なのか。日本人は何のために戦っているのか。

人は——私たちには知っておくべき大義が幾つもあるように——思想のためならほんとうに戦うのだ。「代表なく

して納税なし」「自由か、しからずんば死か」「奴隸制廃止」「デモクラシーのために安全な世界を作る」はアメリカの歴史の流れを変えた慣用句である。これらの熟語を創造するに至った経済的ないしは政治的動機をどれほど認めたとしても、これらの慣用句が私たちを行動させるに至った重要性は過少評価できるものではない。その根は深いのだが、戦っている人はその根のことなどは考えない。できあいのスローガン——シンボル——がなくてはならないのだ。戦争の苦痛と泥と悪臭に耐えさせるだけの約束が必要なのがある。

神道——神々の道

私たちはいかなる問題の上に立っているのかを知っている。私たちは普通選挙権と国民の意思に奉仕する政府とを意味するデモクラシーのために、そしてあらゆる専制政治からの自由のために、個人の権利のために、戦っていることを知っている。人は言葉のために戦うものだ。私たちの言葉は民主主義、自由、個人の権利だ。では日本で人の心を動かす呪文 (the magic word) のような言葉とは何なのか。

三つある。神道、皇道、武士道である。

いかにして軍国主義が日本の国民を完全に支配することになったのか、これらの言葉の歴史が説明してくれる。何に私たちが直面し、日本人が、それも個人としてはしばしば最も礼儀正しく最も洗練された人が軍隊の指揮下に入るとどうしてこうも野蛮人となるのか、説明してくれる。

神道とは「神々の道」を意味する。日本では神道に好奇心をそそる妙な歴史があった。原始的で孤立した人々の土着の宗教であって、周知のように太陽信仰から始まった。

七一二年に書かれ世界の創造から日本の国生みについて語ろうとする『古事記』には太陽の女神の伝説が見られるのだが、この女神はアメのウズメノミコト (Heavenly-Alarming-Female) の露骨で淫らな思いを誘う踊りで洞窟 (訳注、天の岩戸) から外に誘い出されなくてはならなかった。この物語は太陽の回帰を確実にする原始的な儀式を明らかに表している。そのあからさまに性的な人間の自然な特質に豊穡崇拜の形跡がある。

古事記は速須佐の男の命 (Swift-Impetuous-Male-Augustus) や天照大神 (Heaven-Shining-Great-August-Deity) とごった、また神々の排泄物から成りませる鳥々

や八つの頭と八つの尾を持った蛇（訳注、八岐大蛇^{やまたのおろち}）といった、実に驚くべき素材に溢^{あふ}れている。その物語の多くがギリシヤ神話を思い出させる。その多くが同じ原始的な空想の産物だからだ。人類学者なら魅力的と思うだろうが、一般の読者は最初はおもしろがつても、やがてうんざりするのが落ちである。

それでもこの単純素朴で原始的な信仰の宝庫が日本の強さの源泉なのである。これが日本人は文字どおり日本の国土を作った神々の子孫であると日本人に教えているからだ。これが学校教育の基本であり、神聖なる天皇（emperor）という信仰の基本原理なのである。日本は未だにホメロスの時代に生きている。未だに古代の神話を信仰している。真珠湾の前ならば、太陽の女神がエロティックな踊りと自分自身の顔を映す鏡の煌めきに誘われ洞窟から誘い出されたという話も笑ってすませたであろう。しかしこの遠慮がちの女王が初代神武天皇の祖先であり、神武天皇の子孫が現天皇なのである。太陽の女神の無邪気な神話の信仰こそ危険な爆薬と判明する。

数世紀ものあいだ神道は信仰と神々のごちゃまぜの塊^{かたまり}であった。自然界の驚異ならば、岩でも山でも滝でも神道の

神々となつてよかった。稲の神があり、戦いの神があった。しかしあらゆる神道の信仰の核心にあるのは豊穡の思想であった。日本は未だに公共の場所に建てられた男根のシンボルに溢れている。そして日本人が年間一〇〇万の勢いで増えている（又は戦前は増えていた）ことを思うとき、豊穡崇拜は危険なまでに好結果をもたらしたという感じがする。しかしシナから仏教が伝来すると、神道は長期の休眠に陥った。聖徳太子がこの新たな信仰を早くも六〇四年には推奨し、七四一年までに仏教は事実上の国教となった。

神道は深部で天皇の神性と結びついていたから、天皇が権力を失うにつれて先細りとなった。地方の自然崇拜は生き残ったけれども、国家宗教としての神道は十八世紀に本居宣長が忘れられた古事記を注釈して出版したときには恐竜のように死んだも同然であった。

將軍政治、すなわち軍事政権はこの頃にはもう思わしくなかった。有力な封建制度の大名を統制できず、度重なる飢饉や恐るべき流行病を抑えられなかったため、その没落は——神道の復活が神聖なる天皇という教義とともに早めた幕府崩壊は——当然であった。一八六八年明治天皇の王政復古とともに、神道ははっとして目覚めた。神道は死ん

だのではなく眠っていたことが判明したのであり、新政府から国民を一つに纏める手段として取り上げられ、国家宗教の資格を与えられた。

それでも事はそれほど単純ではなかった。一八八九年の帝国憲法は宗教の自由を保証し、それゆえ明治政府は宗教を国民に到底強制できなかったからである。かくして作られたのが、日本人の精神を実に重宝にも躰装させるあの注目すべき信仰形式の一つであった。神道は一つのものでなく、二つあった。宗教上の神道——これは数千もの地方の神社に象徴され、裂けた岩から狐の神に至るまであらゆるものに敬意を表する——は仏教やキリスト教のように信仰された。しかし国家神道への忠誠が全日本人に要求された。宗教の自由は保証されていたから、国家神道は全く宗教ではないということになったのだ！

ヒトラーのアーリア人優越主義のような国家神道

この国家神道が日本人におこったことはほとんど信じがたい。ヒトラーがドイツでアーリア人優越主義(Aryanism)のもとでしようとしたことを七十年もおこなってきたのである。その結果生じた危険な戯言の一例を

引用しよう。それも極端なおおほら吹き^{うぬほ}の自惚れではない。尊敬される学者の意見表明なのである。

「神道は宗教のなかの宗教である。……我が国の歴代の天皇は世界でも比類なく授けられた人々であり、信仰の中心であると同時に世俗権力の中心である。……大日本が世界に拡大し世界全体を神々の国に高めることは現下の急務であり、そしてまた我が国の永久不変の目的である」。

ご覧のように、真珠湾、フィリピン、マラヤ、蘭領インドシナ、そしてシナが経験しているものこそ、この高める過程の進行にほかならない。

神道は原始的なアニミズムと豊穰信仰に始まって、ついには天皇の神格化に至ったのだが、それは今や誰ひとり攻撃する気にもならないほど強力に国民を締め付ける喉輪^{のどわ}となったのである。その崇拜をちよつとでも疑問視するといふ過ちを犯すものは法的告発を免れない。神道とは無縁のある評論家が太陽の女神の物語は実に不完全な神の思想を表していると説明したところ、禁固六カ月を宣告された。

宗教でもないが日本の全臣民が忠誠を尽くさねばならないこの宗教の長所とはいったい何なのか。その道德的原则とは何なのか。どんな希望と救済とを福音としてもたらし

ているのか。

そう問うとき、底知れぬ空虚に直面し、憂鬱となる。国家神道には何の道徳的原則もないからだ。その国生みの論はあまりにも馬鹿げており、教養ある日本人の尊敬は勝ち得ることもできない。性的に活動的な神々から次々と神が生まれていくとはあまりに幼稚で、考慮にも値しない。人が人にどう振る舞うべきか、その規範もない。真の宗教ならば当然の善と悪、罪と罰、受難と悲嘆といった問題とも取り組むことがない。強制的な神社参拝にしても、その中身はアメリカ国旗の下に吊り下げられた安っぽいワシントンの銅板に頭を下げるよう求められているかのように、宗教的な内容がない。

明らかに神道を復活させた人々には宗教にたいする関心がなかった。天皇の権力を確立するため古代の権威を探し求めていただけであって、神道はそれにすぐ役だった。

皇道、すなわち天皇の道のための煙幕を提供したのが神道であった。

皇道——天皇の道

では、天皇 (emperor) の道とは何なのか。二六〇〇年

前にこの帝国を打ち建てたとされる神武天皇がその答を用意している。「私たちは都を世界中に造って全世界を私たちの支配する領域となす」(We shall build our capital all over the world and make the whole world our dominion.)。

日本人の子供なら誰もがこの一文を知っている。日本は神々からの家系を主張できる唯一の国であるから、そして日本の天皇は今日世界で統治する唯一の神 (the only god) であり、国民自身もまた神々の子孫であるから、神武天皇の格言を実行して全世界を支配者神 (ruler god) の支配領域となすことは民族の義務だと教えられている。

又もや私たちは尊敬される学者たちの発言を聞いて驚き呆れよう。それは十年前に聞いておくべきだった。十年前の満州侵入でこの神聖なる使命の実行が明らかとなったのだが、聞いても信ずるにはあまりに馬鹿馬鹿しい言葉であった。

「日本民族が他の国々の原住民よりも勇氣と知性において計り知れないほど優っているのは神々の子孫であるという事実に由来する」と言うのは、学者の平田である。

「天皇は人の姿をした神 (incarnate Deity) であって、日本人の信仰においてはユダヤ教におけるヤーヴェの位置

を占めている。……神道の真髄と要諦こそ日本人の独特な愛国心である」と言うのは、学識豊かな帝国大学教授の加藤である。

そして情報局 (War Office) は以上のことに唱和して陰気な声で次のように言う。「全世界の民族を一つにまとめて幸福な調和をもたらすことはまさに建国以来の日本人の理想であり国家目標である。私たちはこれが日本民族の世界に対する偉大なる使命だと考える。地上から不正と不平等を完全に一掃し、人類に不朽の幸福をもたらすことを熱望している」。この高くそびえるお告げのコピーを、情報局が銃弾と爆弾を以て届けていることに驚かされよう。

もう一つある。「日本の臣民は日の御子 (the son of heaven) という尊厳ある存在をほかならぬ無窮の活気ある中心として、その全活動を、すなわち社会的政治的経済的文化的活動を、全く自然に統合させようとする」。

私が日本に滞在した数年間に、この種のことを数多く公表された。『我が闘争』と同じく馬鹿げた予言的な資料であった。私はそのことを書くとしたが、誰も聞くとはしなかった。それでも私は責める気にはなれなかった。

かかる戯言(ごうごん)には日本においてすら抗議があがったのである。

る。最も有名なのは美濃部博士のそれで、この高名な憲法の教授は馬鹿げた理論全体の起源を提示している。美濃部博士は小論を書いて、市民の権力が軍部に勝(まさ)ることを証明した。陸軍は国民がこの真実を聞くことに我慢ならなかった。たので彼を倒す理由を探し出し、二十五年前に書かれた著作のなかに天皇の地位を国家の一機関と規定する表現を発見した。囂囂(ごうごう)たる非難の声が上がった。日の御子たる天皇陛下を単なる一機関と言うとは！ 天皇の神聖を論点とする問題に掛かり合うことは実に危険であつたから、進んで美濃部を擁護するものは一人もいなかった。彼の著書は発売禁止となり、名誉と勲章は剥奪されたうえ、彼のもとで学んだ弟子は皆免職となった。美濃部の天皇機関説は陸軍が恐れたような天皇攻撃ではなく、陸軍が自らの目的のために作り上げた天皇をとりまく霧に風穴を開けたのであつた。

このように神道と皇道は手に手を取り合つて行く。天皇は悪いことができないので天皇の権力が日本のみならず世界を動かさねばならないと証明する力に欠けているとき、その力を埋め合わせるのが神道であつた。

更にまた驚くことがある。この巨大なナンセンスの拡大

と苦闘したあとで、神聖にして全能の神支配者 (god ruler) には鼻の上の羽毛を吹き払う力すらないと知るとはっと息を呑む思いになる。天皇は強力どころか、絶対的かつ取り返しがつかないほど無力なのである。象徴^{シンボル}として天皇は全世界を巻き込む戦争を始めさせているが、支配者としてはドナルドダックであつてよかつた。天皇という象徴^{シンボル}は神道の布教者によつて巧みに設計され、軍部がただ単に天皇を利用する目的で入念に仕上げられた。人はいたずらに飢えないし危険と死にも直面しないことを軍部は知っている。理屈ではなく象徴^{シンボル}が衷心から感情に訴える反応を引き起こして、それが人を戦わせるのだと軍部は熟知している。そこで軍部が学習計画に責任を持った。日本の子供たちがどんな知識をもつても大日本や大和魂 (the spirit of the Yamato race) への心からの愛着を否定できないほど神道と皇道の教えを吹き込んだのである。

天皇の背後にある権力

日本の権力は天皇をコントロールできるグループに行使されている。このことは憲法の起草者がはっきりと予期していたことであつて、いずれそのことが読者にも分かるで

あろう。しかしまず、今や天皇は軍部の言いなりになっているのだから、日本人をコントロールしているあの三位一体の象徴^{シンボル}の最後の一つ——武士道、すなわち戦士の道——について知っておく必要がある。

日本の長い歴史のなかで国内の勢力が権力を求めて互いに争わなかつたという時代は実に稀有^{けう}であつた。多くの相容れない好戦的な氏族が割拠して、日本は内戦に慣れていた。次々と氏族が登場して一時期権力を握り、無能な天皇の「庇護者」となつて驕り高ぶるなか、力をなくすと別の氏族に取つて代わられた。日本の物語は曾我氏、藤原氏、平氏、徳川氏のそれであつて、より強いグループが擡頭してその地位を占めるまで、その不安定な軍事体制が権力を握らせていたのである。

少なくとも八百年にわたつて日本人はサムライとして知られる戦士階級が存在に慣れ親しんできた。封建的主君にたいする盲目的な忠誠、それが武士の掟であつた。これら武士の大群は非生産的であり、餓死寸前の農民や威嚇される商人には耐えがたい負担となつていたから、耕作可能な土地が少ないこの国の経済をひどく消耗させるものであつた。しばしば、余りに大きな負担が生じたときなど、飢饉

や暴動が起きた。この体制が一八六八年（明治元年）まで続いた。

日本人は数世紀のあいだ武士の組織的な脅迫に悩んできたから、喜んで武士の権威を否認したと思われるかも知れない。しかし又もや強力な象徴はあまりにも深く植えつけられていて、木が枯れないことには根こそぎできなかった。サムライは地位を奪われ、実業界に入り、知的職業に、軍務に就いた。武士道、すなわち武士の道はサムライの血を引くことを誇りに思う子孫に今なお重んじられ、士族ではなかったものも武士の精神をとにかく賛美することを都合がよいと思った。特に、武士道は封建的主君への絶対的かつ疑問の余地のない忠誠を武士に命じていた。日本で最も人気を博した物語は主君の敵を殺して主君の恨みを晴らすまでは休むことがなかった四十七人のロウニン（主人を亡くした人々）の物語で、そのあと彼らはハラキリをおこなっている。

近代日本ではこの武士道の掟が産業に引き継がれた。企業の従業員は、サムライが主君に縛られていたのと同じ方法で雇用主に縛られている。この関係を自慢もし、長時間文句も言わずに働く。もし仕事が果たせないならハラキリ

すらおこなうだろう。他方、日本人の雇用主はしばしば住宅や保養所、浴場、安価な社内食堂食を提供する。興味深い話を藤原王子製紙社長から聞かされた。ある従業員がアメリカに送られ、新しい機械の操作について学ぶことになった。その従業員は短刀を持参し、もし首尾よく使命を果たせなかったらサムライのように死ぬつもりだったという。

私がこれらの国民的象徴の力と濫用の興味深い事例に注目するようになったのは日本の大学（訳註、立教大学が東京帝国大学）で教えていた時だった。学長は日本人だったが、教授陣や同窓会からすれば好ましがらざる人物で追いつきにかかっていた。日本で人を追い出す最も簡単な方法は天皇にたいし無礼だと明らかにすることである。そこで彼らは口実を探しまくり、それを見つけるのにさして時間はかからなかった。

学長が大学の礼拝堂における学生団体の集会で聖歌隊の近くにある階段を一つ登って天皇の詔勅を読んだ。その次に牧師が祭壇から祈りの言葉を讀んだのだが、そこは勿論随分と高かった。そのため学長はキリスト教の祈祷が読まれた位置よりも低いところから天皇のお言葉を読むことに

なったが、それが天皇にたいし実に不敬だ、許しがたいと論難されたのだ！

十分な雰囲気根回しにより出来上がると、共謀者たちは学長と会った。学長はどうして欲しいのかとたずねた。

「サムライの義務を知っているか」と彼らは言った。

その答は十分に分かっていたが、学長は

「あなたたちはどう思うのか」と応じた。

「サムライの義務は桜の花のように散ることだ」——これは日本人が好んで使う言葉で、「あなたはもう死んだ」ということだ。もっと正確に言えば、「何が自分のためになるかを知っているなら、辞める。真のサムライなら、自決でもせよ」となる。辞表が出された。学長はすばらしいリベラルな人で、真のサムライであることを証明しなかったことを私は喜んで言っておきたい。

この事例に明らかのように、象徴^{シンボル}は悪用されたときでさえ何とも強力である。学長がおそらく日本の神々に敬意を示さなかったことから神道^{カミミチ}が絡んできて、天皇の言葉が神聖な啓示のように扱われることから皇道^{カミミチ}が絡んでくる、そして武士道は自殺についての巧妙な示唆において絡み——国家的な象徴^{シンボル}の全てが小さな浅ましい学内政治上の問題に

おける建て前の敬意にかこつけて大手を振って歩いたのである。

軍閥の目的

誰がこれらの象徴^{シンボル}を育てているのか。誰がそれを国民の頭に叩き込むことに責任を有しているのか。

主として軍閥であつた。そこから得るものが最も多かったからである。征服に熱中しているので、全世界を天皇の支配領域とすることが宗教的な義務だという思想が軍閥にはお気に入りなのだ。ひとたび天皇を意のままにすれば天皇をコントロールするかぎり好きなように世界を処理できると知っているのだ。

この三つを一つに統べるのが忠誠という概念である。神道は神々の建国した帝国への忠誠を意味し、皇道は天皇への盲目的な忠誠を要求していたから、言っていることは同じである。そして武士道は忠誠と服従という徳目を称賛しているから、これもまた同じところに落ち着く。

忠誠にかんするこのお祭り騒ぎ。私たちはそれに急かさへへとへとなりながら、いったい忠誠とは何のための何にたいする忠誠なのかと問いたい気持ちになる。

忠誠という概念は、言うまでもなく封建社会の遺風なのだが、そこから何が生ずるのかと問うても、何も答は聞こえてこない。個人にとって、人間として、人間にとって得るものは何もなかった。盲目的な服従に都合よく甘んじるものにとっても人生が少しでもよくなるという契約もない。日本の学校教科書は封建的主人のために自己犠牲を厭わなかった勇敢な人物の物語でいっぱいだ。しかし私はその犠牲が何かの結果に終わる、という物語を一つも見ることがない。いつも次の戦い、次の殺害になるだけなのだ。

日本人がヨーロッパやアメリカやインドやシナの知性を虜^{とりこ}にしてきた大きな道徳的問題に無関心なのは致命的だ。

日本にはミルトンがいない、ジョナサン・エドワーズ、孔子、プラトンがいない。聖書に匹敵する宗教的作品もない。日本人の関心はその国家的象徴^{シンボル}が証明するように、人間ではなく集団 (herd) にある。日本人は集団 (group) のなかで集団のために生き、その注目すべき社会組織は蟻のコロニーのそれと比較される。蟻は多くの蟻を産むために休みなく働き、生まれた蟻もまたもっと多く産むために休みなく働く。日本人の学習計画には精神の解放も理性の啓蒙もないのだ。実際、神道や皇道のあの仮定条件はあらゆる

る自由な探求を厳しく抑圧することを必要とする。たとえば人類学者が日本民族の起源を調査しようとしても神聖な起源にかんする神話が破壊されるとして禁止されてきた。

シナ人が最高の個人主義者であるのとは違って、日本人には個人として在^あることに奇妙で幼稚な恐れがある。かくして今日の日本には独裁者はいない。政府には独裁的な性質があるにもかかわらず、支配は集団としての軍部によって行使され続けている。この集団にあえて反対の信念を吐くものはやがて消されてゆく。シナや西洋からあれだけ借用してきたにもかかわらず、日本は個人の役割を抑圧してきた。

日本も象徴^{シンボル}によって生きているが、その象徴たるや個人に決してチャンスを与えない、そして個々人の魂や精神や運命にかんして決して考^{かん}えることのない文化の象徴^{シンボル}である。人間が人間として有する尊厳、個人の自由——そのために私たちは戦ってきたし今もまた戦っている——は日本に存在しない。

これはまじめな告発である。後に述べるような例外があるにもかかわらず、長期の日本滞在や日本の国民^{国民}にたいする心からの親睦の念があるにもかかわらず私は告発してい

るのである。

日本が自由な思想にたいして死の恐怖を抱く一例は、警察がおこなった「危険思想」撲滅運動である。八年間に六万人が国民的神話にたいして危険な思想を表明したとかの嫌疑で逮捕された。日本では危険でない思想はない。この国は個々人が自分のことだけを考えるほうを好むのだ。

個人の重要性の軽視は更に暗殺の横行にも見られる。過去十年ないしは十五年の間に日本の最高の知性の持ち主が何人もいのちを奪われた。殺人者は皆「愛国的」な動機から実行したにせよ、いかに神聖なる天皇への忠誠をめぐる国民的ヒステリーが、あえて自分で考える個人を殺すに至っているかをしめしている。

誰が敵なのか

神道、皇道、武士道の強力な支持者は勿論軍部であつて、その大義に仕える狂信者や秘密結社から声援を受けていた。実業界や労働組合、金融界や政府官僚の自由主義勢力との長い闘いを経て、軍部は天皇にたいするコントロールを確立し、今や天皇は明治維新前の父祖と変わらぬ囚われの身であり、傀儡となっている。

日本の国民ではなく彼らこそ、東洋に解き放たれた戦渦で起訴されるべきなのである。国民は一貫して彼らに否決の投票をしてきたからだ。一九三七年にもなると軍はただか五十議席を国会に占めたに過ぎず、対するリベラル派は四六六議席を獲得していた。それでも自由主義の表明は何であれ、彼らは新^あ手の攻撃や暗殺や「危険思想家」の逮捕をもつていっさい撥^はね付けた。彼らは政府の作戦用兵を内閣行政の圈外とする憲法を盾に、いつでもどこでも好きなように振る舞った。満州では本国政府に無断で戦争を始めた。一九三七年には大衆や政府の反対をものともせずシナを攻撃した。その戦争は世界に対する戦争であるばかりでなく、自国民の自由に対する戦争でもある。

日本を起訴するとなると敵を選ばねばならない。その際、多くのリベラル派、良き精神と良き意思の持ち主は除外せねばならない。いのちがけで、軍閥と戦ってきたからである。一般の人々も除外せねばならない。真実の新鮮な空気がナイフのように身を刺し風穴をあけるまでは、この国策の嫌な臭いを呼吸するよう強いられてきているからである。

私たちの刑罰は古代の氏族の現代版とも言うべき軍部、特に陸軍に宣告されねばならない。陸軍こそ計画的に若者

の精神を毒し、賢明であるがためにこの毒をひと啜りもしない人たちを、殺害している。そして憲法の立案者にも、遅まきながら、宣告が下されねばならない。憲法を、陸海軍の支配には好都合に、真の代議政体には不向きなようにしているからだ。日本の憲法を書いた人たちもあの一族と同門の人たちであつた。古き伝統を続けながらも、彼らは徳川幕府を崩壊させて自分たちのために遙かに独裁的な権力を保持することに意を注いだ。最高戦争会議は天皇（實質的にその道具である天皇）以外の誰にも責任を負わず、長州閥と薩摩閥が軍部をコントロールできるように設計されていた。陸海軍の指導者たちは確かにあの一族とはもう同門の人ではない。それでも陸海どちらにせよ権力のある地位に昇り詰めることは、あの古代の一族の精神構造に化膿し続けているグループに入ることなのである。

日本はヒトラーが擡頭する遙か以前からファシスト体制にあり、そのルーツは深く母国の温床に根ざしている。不合理な人種上の神話に基づく狂信的なナショナリズム、政府と人民をテロリズムと脅迫により完全にコントロールする軍閥、自由な思想と自由な調査の完璧な抑圧、完璧なスパイ体制、そしてそれ自体を目的とする人種的国家

(racialstate) の賛美——どれもこれも日本にはあつた。リベラル派がこの体制を覆そうとすると、たちまち容赦なく抑圧された。一八八四年（明治十七年）板垣退助の自由党は同門の人たちにより解散させられた。一八八七年（明治二十年）保安条例（martial law）が首都から反対派の指導者を放逐する口実として東京で宣言された。一九二〇年代の平穩な議会政治が軌道に乗りつつあつた時代のあと、浜口首相の殺害を機に、再びテロの珍らしくない支配が始まつた。

日本精神は時代錯誤である。国際世界で島国根性でありながら、その流儀が広い地球の流儀であるべきだと信じている。あらゆる個人の権利を排除しながら、日本精神は軍国主義国家の意思に身を任せている。

そしてこれがマラヤ、フィリピン、蘭領インドネシア、ニューブリテン島で実際に作用している精神であり、明日はどこがまたそうなるかは誰にも分からない。それを全面的に打破することは、日本の多くの真剣で自由な精神の持ち主と庶民がもう一度解放のプロセスを始める手助けとなる。すでに多くの人が解放のためにいのちを投げ打つてきた。私たちはかかる人たちと戦っているのではない、その

人たちのためにこそ戦っているのである。この由々しき被征服国から立ち上がる日本こそが、彼らのもつ良き特質のなかの最高のもの——私たちが尊敬するところの礼儀、天真爛漫、誠実なる友情、家庭愛と家族愛、感性豊かな鋭い美的感覚——を築き上げるであろう。かかる日本こそが、そしてかかるもののみが明日の世界における相応しい位置を見出すであろう。

ブラッドフォード・スミス「日本——美と獣」

(Bradford Smith, Japan: Beauty and the Beast, *Amerasia*, April 1942)

【編集部注】 本誌『アメレイシア』の先月号はスミス氏の「日本精神」を掲載した。それは過去数世紀にわたって日本国民の思考方法と行動様式に影響を及ぼしてきた神道、皇道、武士道といった、公式に奨励されている日本人の考えを論じている。本稿ではある典型的な日本人の一家を紹介しながら、いかにこれらの信念がこの一家の日常生活の行動に表われているかを示す。

異なる二つの視点から見ると異なる二つの光景を表すという、そういう類の一枚の絵 (picture) がある。一方が出現すると他方が消えるのである。この二つの光景は一つにして、しかも異なる。日本人について考えるものは誰もがこれと同じ二枚の絵の現象に遭遇してきた。郷里では家族を愛する従順な人々なのに、南京に雪崩れ込んだときは冷酷な野蛮人——このように全然一致しないのである。同じ人間が、生活が芸術であるような世界を創り、殺人と残虐行為とが大混乱を生み出すような別世界をも、どうすれば創り出すことができるのか。その答は私たちが対処せねばならない敵の本質を知るうえで重要である。それは偏見なしにこの絵の両面を見て初めて知りうるのである。

典型的な日本人の一家を紹介すると

東京の典型的な家族は子供が三人か四人いて、東京の広大な近郊に三室か四室ある小さな家を持っている。この一家を渡辺さんと呼ぶことにすると、渡辺さんはホワイトカラー（日本人はこの英語を好んで使う）で、東京の都心の大きなオフィス街で働いている。給料はアメリカの五〇ドル相当額の月給よりも低い、五人家族を養うには十分で

あるばかりか、余暇や銀行口座のためにも十分過ぎる額である。

渡辺は例の「仲人」(go-between) から妻を用意された。仲人が若い二人に出会いの「機会」を与えて結び合わせるのだが、二人は互いに満足して、この縁組みは完了した。その際、愛情は関係なかった。が、渡辺はまじめな若者で、時たま会社が従業員に与える夕食会で少し酔いしれたとしても、妻には想定内のことであった。彼らは子供が自慢で、母は慎ましい主婦で、仲良く一緒に生活している。

一家は毎朝夜が明けるとともに起きる。渡辺は着物を着て近所をちよつと散歩してから洋服に着替え、半時間ほど電車で揺られて職場に向かう。帰宅するのは六時以降になる。雇い主から残業を頼まれても落ち着いたもので、それも彼の生計を支えてくれる人への義務の一部だからだ。

妻は子供たちを学校に送り出したあと、木製の湯ぶねから水を抜く。その前夜、まずお父さんが、それから男の子、娘、母の順に、順序を違えずかわるがわるに入って、小さな浴室の板の上でカラダを洗ったあと、非常に熱い湯ぶねのなかに首までつかった、お風呂の残り水である。毎日の入浴は宗教的な沐浴と同じくらいほとんど習慣的である。

自尊心のある日本人はこれなしではやっていけない。

格子造りの障子の戸から埃を払って、柔らかな箒で黄金色の畳の掃除も終えると、渡辺夫人はカラカラと下駄の音をたてながら近くの店にその日の買い物に出かける。少しばかりの野菜に、魚の一切れ(もし贅沢をする余裕があればイカの足)、大根の漬け物を何切れか、そしてひよつとしたら卵を一個か二個——これがその日の食事に必要な全である。味噌売りの行商人が肩にかけた竿に桶を吊して彼女の家立ち寄るし、そしてまだ米櫃のなかには米が、食器棚にはお茶がある。

もし通り道で友だちに会えば、彼女はお辞儀をして、これによれば立ち止まって健康と家族のことを尋ね合う。彼女を待ち受ける家事の負担は重くない。家は小さく、家具はないも同然であり、日本人の料理法は実に質素であって炭の火鉢でなされるのが普通だからだ。多分彼女は長い平坦な洗濯板で衣服を濡れたまま平にして、アイロンがけがいらなように、ちよつと洗濯をするであろう。

この間、子供たちは近くの学校の校庭で拡声器を通して流れるアメリカの行進曲に合わせて朝の準備体操を始めた。それから数千の漢字を習うという難しいことに取り組むが、

日本が書き言葉の基礎として漢字を取り入れたことほど不幸なことはなかった。

風呂敷一杯に買い物をして帰宅すると、渡辺夫人は高い垣根に囲まれた小さな八フィート（二メートル四〇センチ）四方の庭に立ち寄って、入念に手入れされた庭から落ち葉を拾い上げたり、常緑樹の盆栽から枯れ葉を引き抜くこともある。ガラス戸はいつも庭に面した家の中が見えないよう動かされていて、太陽は冬ですら部屋を暖めてくれる。いずれにせよ火鉢の小さな炭火の固まりを除けば、これだけがこの家の唯一の暖である。

このように丹念に手入れされ空間を数倍も大きく見せる庭を除けば、この家の芸術の中心は居間の床の間にあって、掛け軸と花の花瓶がいつもそこには見られよう。今朝がその花を変える時期かも知れない。もしそうなら買い物の時に渡辺夫人は花を三本か五本ほど買って来たであろう。花を一つずつ習った通りに満足ゆくまで動かして生け花をする。日本の生け花は花瓶に十本ほどのバラを詰め込めばよいというものではない。芸術なのである。

そして渡辺さんが会社から帰宅して一風呂浴びてから簡単な夕食をすませて、子供たちとお喋りしたあとは火鉢を

囲み、随分とこのころは配給されるようになったタバコに火をつけて一服し、ラジオにスイッチを入れてシナ大陸や南太平洋の戦局に耳を傾けながら、床の間の花と掛け軸の地味な美しさを愛でるのである。

あるがままの日本人の生活を描けばこうなる。

しかし渡辺さんに独身の弟がいて、シナに出征していたとしよう。彼は南京で五〇、〇〇〇の日本軍が解き放たれて四二、〇〇〇の無辜のシナ人が殺されたとき、そのレイプオブ南京にひよっとして参加していたかも知れない。日本軍が家に押し入り、泣き叫ぶ赤子の胸に銃剣を突き刺し、それを止めようとした息子や父を殺し、それから母と八歳の娘を裸にしてレイプしてから無慈悲にも死に至らしめたとき、ひよっとして兵士の一味と一緒だったかも知れない。ひよっとしたら命令されて数百人単位で射殺してそれから首を斬り落とした分隊に加わっていたかも知れない。または無辜の人たちがロープで繋かれ、生きたまま灯油をかけられて焼かれていくのを見ていたかも知れない。白昼堂々と店から運び出した酒を痛飲していたかも知れない。気に入ったものは何でも勝手にとっていたかも知れない。運び出せないものは手当たり次第に破壊していたかも知れない。

もし渡辺さんの弟が家にいたとすれば、兄のように結婚

して勤勉に仕事に精を出していたであろう。家族を養い、家族を誇りにしていたであろう。春や秋には郷土の人と一緒に出かけて、桜が咲いて花びらが散っていく、或いは楓の葉が秋晴れの空に深紅に映えるといった、一瞬の奇観を愛でていたことであろう。最悪の場合は一年に数回酔っ払ったり——これは日本人一般の欠点——或いはひよっとして吉原の遊郭を訪ねていたであろう。たいていは僅かばかりのものに安んじて大まじめで波乱のない人生を、貧困と艱難に慣れた人々にまじって送っていたことであろう。日本人の判断基準では、家族には忠実で、家庭を愛し、芸術と自然にたいする感受性があり、清潔で、勤勉で、辛抱強く、礼儀正しかったであろう。

彼は治安のよい都市に住んでいたことであろう。都市は、警察が各家庭を清潔で衛生的であるかを見るため定期的に立ち入り検査をし、交通の便、電力、水道、医療、警察の保護は効率的で、よく管理されている。

それでも彼はあの史上最も残忍な大量殺人の一つに参加してしまった。いったいどうすればこんなことが起こり得るのか。そしてどのようにして数千の物静かな家長が粗暴

な獣以上に邪惡となったのか。

レイプオブ南京については吐き気を催さずにはまず読めない。それでも道徳的に非難されねばならないことになりて理性が答を与える限り、日本人の生活の九つの要素からそれは説明される。その結果生ずる非難告発は、平時の日本人を知っていて好きな人にとってはうまい愉快なことではないが、それこそがあの民族の解明に役立つのであって、今それが重要なのは勿論のこと、平時の世界を再建するという想像を絶する困難な課題に取り組むとき決定的に重要となるであろう。

人を作る道徳の教え

まづ第一に最も重要なのは、日本人が受けている道徳教育の本質である。この教育は孔子の学問をちよつと付け加えてはいるが天子 (the son of heaven) としての天皇 (the emperor) に基づいている。天皇は世界で唯一の神聖なる支配者であり、日本人はその子なのである。学校に行く六歳から——或いは旗を持てる年頃となったときから——日本の子供たちは天皇に尊敬を払うことを学ぶ。祝日には学童たちは楽しい遊びに興じないで、とほとほと学校に歩い

ていつて皇居か天皇陛下下の写真に向かつてお辞儀をする。

校庭に多数の兵士の列のように整列させられて国歌を斉唱し、支配者のために万歳三唱をする。そしてひょっとしてその日はそれから死せる戦士の霊を祀る靖国神社か、この町中に散在する戦争の神である八幡を祀る神社の一つを参詣する群衆のなかにいるかも知れない。

かかる教育があらゆる授業において同じように繰り返されることから、子供たちはこれを銘記せずにはおれない。そして、しばしば起きることだが学校の火事の際に天皇の写真を持ち出そうとしていのちを落とした校長や、写真を容易に移せたのに身を捧げようとしなかった校長の不名誉について聞くにつけ、子供たちはこの愛国心は重大な務めであると悟る。

日本人の生活の単位は家族である。家長への服従は当然のことと見なされる。売春に売られた多くの少女が自分たちには抗議する権利があったのだとか、それより幸運な少女が夫を選ばれたとき自分たちには選択と議論の権利があったのだとは、思いもつかない。心中（すなわち恋愛の果ての自殺）の頻発こそはこの意味における無情な家族意思の結果であり、そしてそれになりたいする必然的な屈服の結

果——すなわち死——なのである。

これを敷衍（ふたえ）して言えば、天皇は日本の全家族の父であり、その言葉は法である。天皇は天皇をコントロールする軍閥の傀儡（かいらい）でしかないということは日本人には問題にもならない。たとえ日本人がこのことを疑ってみても、神聖なる支配者という教義は理性では根こそぎにできないほど深く植えつけられている。そしてちょうど人が家族に服従するか死ぬかするように、人は天皇に仕えることがたとえ死を意味することになろうとも天皇に服従する。

「靖国で会おう」と言つて、日本の兵士は戦場に行く。何年もの教育に刻印され、神社を訪問して、兵士たちは天皇のために死ぬことによって国家の戦死者でいっぱいになる。霊世界（spirit-world）に場を与えられ、そしてこれが羨ましいほどすばらしい地位であると信じて疑わないのである。どの国もその国なりに愛国心を持っているから、もし日本人がある種の国家への献身を単に吹き込まれているだけのことであれば、毛を吹いて疵（きず）を求めるようなことはすべきではない。ところが日本人は自分たちだけが神の子孫であり、日本以外の世界は天子の子に生まれる好運に恵まれなかった野蛮人だという信念で養育されてきた。強壮な男

性は軍事教練制度を経験するのだが、それは予備兵役が満期となるころには二十年にもなっている。ここで、学校においてのように、優越しているという教義が説教されるが、それをもつばら幻想的に説教される。そこでどうしても農村の無邪気な若者は信じ込まされることになる。軍隊の大部分は彼らから編成されており、これと違ったことなど彼らは全然聞いたこともないからである。これほどこの説教には威力がある。これには、ヨーロッパの世界に通じた教養ある日本人でも公然とは反対し得ないほどである。

それゆえ日本人の道徳教育はもつばら家族と国家への忠義という考えで成り立っている。いかに恵まれた民族であるかを理解しない人を嘲笑するという点では、激しい古風なヘブライ人の選民思想に少し似ている。日本人は故意に、そしてこれが第二点目となるのだが、日本人を日本人以外の世界から画然と区別する。日本人には人類の家族同胞という考えがないし、非日本人世界を見下すよう教えられている。この信念の危険なことは考えてみるまでもない。それがシナの不幸に見られるのである。

そしてここから第三点目に導かれる。それが国民的な劣等感であって危険な精神病の段階に達している。というの

は、日本人はこの世の恵まれた民族であると教えられてきたからである。それでいて日本人は地球上の唯一の神聖なる住民と自任していることが日本以外の国からは笑われていると知っている。最も素晴らしい日本の文明の多くは韓国やシナからの借り物であり、産業や武器において現在有する強みは（今では日本人に学ぶよう強いことを随分私たちは後悔しているのだが）西洋世界の私たちから取得したということも知っている。

島国という孤立した位置にあつて、日本人は自給自足の活気のない時代をひたすら生きてきたが、とうとう日本人にはないものを持った外部勢力によって突然目を覚まされたのであつた。それを熱心に受け取ると、それからその負い目に憤慨した。かくして時代は異なるが、シナ人、ポルトガル人、オランダ人から知識を聞き出すと、それから彼らを追い出すか厳しく入国を制限した。日本人というものは主たるものが借用物であるために精神的に傷ついていて、それが私たちへの負い目の憤りへとますます高じている。私たちが今直面しているのはそれなのである。

文字はシナから、芸術は朝鮮を経由してシナから、科学と産業と近代的な戦争は私たちから借用したものであるこ

とを、日本人はひどく意識している。私たちも日本人から、芸術における日本人の簡素さと高潔さの確かなセンス、日本人の自然理解を学んだ。しかし日本人が私たちに一番理解させようとした馬鹿げたテーゼ、日本人の神聖な皇道こそが唯一の平和の道であり、ひとたびそれを受け入れるや世界は繁栄するというテーゼは拒絶した。この種の論文やパンフレットは私が日本にいたとき山ほど出た。それは日本人が自分たちの文明をユニークと信じているものであったが、私たちからの借用物を賞めちぎったあとでさえ、そのユニークなるものは私たちには関係なかったであろう。

さてそれから日本人は神聖なる天皇の力が何をなしているか、世界に示そうとするのであった。そして今私たちに示している。その考えは勿論このように明確に系統立てては述べられてはいないが、私はこれからその集団心理を分析したいと思う。その動機は稀にしか意識されていないからである。

この強烈な日本人の国民的誇りに二つの痛棒が振り下ろされた。その痛棒とは人種平等を承認しないという国際連盟の拒絶と、日本人の移民を禁止した排日移民法で、それが忘れられたことはなかった。この二つの採決によって、

一方は不公平であり、もう一つは名ばかりの移民割当制を採用することで容易に避けられたものであったから、私たちは私たちにたいする限らない嫌悪を引き起こしてしまった。国際社会で罪のないものはない。南京の血の幾分かが私たちの手に浴びせられている。この二つの大失策が、正当な恨みの原因となった。しかもそれが日本人の実に傷つきやすく過大ともいえる誇りによって強められたため、軍国主義の足がかりとなって、国民的な精神病を強化したのである。

双子の敵——自由主義と個人主義

日本人を日本という国で観察したものは誰でも、日本人が個人として行動しようとはせず、常に集団の一員として行動するのを好み、しばしば集団的圧力を利用することを見て知っている。私が教える日本の大学に行って、教室が空っぽと気づかされるのは稀ではなかった。というのは、もし二人か三人の学生が祝日気分であるならば、自分自身の責任でサボろうとはせずクラス全員に提案して決まって一緒に消えたものだ。その結果、その責任はその集団全員が共有するから全員均しく負うこととなって、軽減される。

同じく学生は好きな教授の解雇をめぐつてしばしば長期欠席を行う。このように個人主義を恐れることが、たとえ政府にファシズム的傾向があるにせよ、国内問題では独裁者の出現を妨げてきた。むしろ支配権は事情通の日本人でさえ確信を以て名を挙げられない非公式集団のなかにある。

平沼騏一郎男爵はこの支配的集団の一人で国本社という反動的団体の創始者だが、次のように語ったことがある。

「いかなる塵^{ちり}や埃^{ほこり}も皇道の輝きを曇らすことは許されない。そして私が塵や埃と呼ぶのは我が国の伝統的な慣習に反する自由主義と個人主義によつて代表される」。

改めて言うまでもなく、ここに、個人にたいする日本人の態度がある。日本人は集団の一員として行動しないと居心地が悪いのだ。会派を作り、集団で練り歩き、集団で自然観賞の旅行に出かけ、どうも自分は自分であるということとを恐れるあまり自分自身を集団意識のなかに沈潜させ、アイデンティティを失うことを好むのである。大勢であちこち動き回る人々で、日本は溢^{あふ}れている。汽車には一緒に学校の遠足に向かう多数の学童、人込みでごった返す神社、そして公衆浴場でさえ一緒に体を洗い湯氣を立ててお湯のなかにつかる。野球に大いに人気があるのは、一つには、

そこで日本人は集団でいられて、仲間と一緒に動き、囃^{はや}し立てるといった機会に恵まれるからだと思う。

それゆえ、このことが第四点目となるのだが、日本人はほとんど個人を尊敬しない。個人の権利の意義をほとんど理解しない。個人でない時——身も心も集団の一部でしかない時——の方が遙かに快適なのである。そして集団的心理は、私たち自身のリンチからも当然知られるように、危険な心理である。

身体的に見ても、日本人は自分独りで生活しない。どの公衆浴場も最近までは男女共用であり、田舎では今日でも真ん中に糸ひもをひっぱただけの浴場に出くわす！ 法律は水着の着用を求めているが、女性が公の浜辺で衣服を着替えたり、若い女性が玄関口にやってきた配達少年と上半身裸で呑気に会話しているのをよく見かけることがある。

日本人には個人の自我にたいする無関心どころか恐れさえあって、それが個人の権利にたいする関心の欠如となっている。それゆえ個人の生命にはほとんど価値が置かれな^い。ここに、今日の日本人の行為を説明する第五のポイントがある。地震、台風、洪水、猛烈な火災、飢饉、流行病

が何世紀にもわたって頻発して、多くの人命が失われた国では、個人の儂い^{はかな}存在が必然的に死のストイックな受容をもたらしただけ。毎年のことなのだが、大自然の摂理において個人はさして重要でないと感じることは、人はこの破壊的な経験を甘受できないのである。

日本人はよく知られているように、他のどの民族よりも躊躇なく自殺をする。私のノートは、恋愛のため、病気のため、事業が失敗したため、家族の指示に同意できないため、「愛国的な動機」のため、自殺をしたという東京の新聞各紙の切り抜きで一杯だ。数々の日本の熱烈な愛国者が政府の決定に抗議して自殺した。時には愛国者が非愛国的な行動を犯していると思う役人の玄関前に静座し、死の間際の説明書を帯に突っ込んで割腹する。

人間のいのちの儂さ^{はかな}は仏教の哲理の説くところであり、それが一つの要素かも知れないが、仏教徒でもあるシナ人は強烈な個人主義者であって、日本人以上に卑劣に自然から扱われているにもかかわらず、実に生に執着し、なかなか死のうとはしない。

そういうわけで、日本人は自分のいのちをもあまり尊重しないのだから、戦争で襲いかかった犠牲者——否^{いな}、日本

人のようには神々しく創造されていない犠牲者——にあまり敬意を払わないとしても、驚くべきことではない。日本人が獣のように行動するのは受難を知らないからではない。災難なら、日本人も十二分に経験している。ただ単に、個人のいのちは取るに足らず、その存在も全く取るに足らないからである。

しかし私たちに最も衝撃を与えた日本軍のシナにおける振る舞いは女性にたいする残忍な攻撃である。それは祖母でも若い少女でも免れ^{まぬ}なかった。そしてレイプは残忍で、しばしば死を招く結果となった。その犯罪を軽くしないで、日本では男性の性的行為にたいする倫理が完全に欠如しているという事実をただ受け入れるしかないのである。つまり、これが第六の要因である。売春は公認され広がっている。公認された遊郭は五三二カ所もあり、五万二〇〇〇人の女性がいて、一年に合計二三〇〇万の訪問を受け入れている。若者は売春婦ではないが、しばしば有力なパトロンのめかけとなり、タクシードンサー（ダンスホールは最近国家の緊急事態のために閉鎖された）や多くの小さな酒場の少女は違法行為に身を落とすのが常なのである。

日本の宗教である神道が豊穡の原始的崇拜に基づいてい

ることは疑いようもない。今でも多くの場所で男根崇拜を象徴する物体が見られるし、性的に過度に発達した醜い女の半身像が多くの店頭に立っている。豊穣信仰は原始的な民族には珍しくないのだが、日本人の精神には今でも根強く息づいている。非常に文明化した国々においてのように、それが人間の性的義務にかんする高度の倫理的な考えにとつて代えられることはなかった。忠実な妻は夫が一杯か二杯飲んで吉原に行くとは決めると、夫が道楽を終えて無事に帰宅するかを見届けるためしばしば夫に付いていくと、私は確かな筋から聞いたことがある。

普通の日本人としては実に家族に忠実な男がどうして自宅でくつろぐことに満足しないのか、私たちには想像することも困難であり、実際は不可能である。しかし私たちはキリスト教の二〇〇〇年が私たちに与えた目で見るとはしない。多産のための性的行為は日本人には罪ではないのである。豊穣信仰が当然のこととして日本人を一夫多妻の営みに駆り立てているようだ。一連の軍事行動中に強いられ長期の禁欲に加え、これがレイプオブ南京の背景にある。

原始的な儀式——残虐行為の起源

しかし日本軍征服者の非人道的蛮行を理解するには、日本史の少しは知られた一面——首狩りの習慣——にまでさかのぼらねばならない。古事記、すなわち「古代の事柄の記録」には我が子の首を打ち落とす神さまの話が出てくる。この行為があたかも来たるべき事態の予言であるかのように、日本の（十二世紀から十九世紀まで続く）封建時代の武士は互いに数世紀も内乱を戦って、よく洗練された首斬りの儀式を創り出した。敵の首が戦勝の記念品となつて、戦功の証として高く評価された。当然、日本人は外国の敵と遭遇したときも、同じ戦術を採り続けた。

日本が一五九八年（慶長三年）に朝鮮に侵攻したとき、三万八七〇〇の朝鮮人の首を切り落とした。こんなに多くの戦勝記念物は日本人でさえ本国に持ち帰れなかった。しかしこの問題は耳や鼻を削ぎ落とすことで解決され、樽に詰めて京都に運ばれた。耳塚が観光客に今日でも見せられている。

モーガン・ヤング氏は、徳川家康が権力を握る際に殺したおよそ数千の敵の首が京都から伏見につづく道沿いの板の上に積み上げられているのを宣教師たちは見たと、『異

教徒国家の興隆』に書いている。そして一六八〇年（延宝八年）にはサムライが平民を試し切りにすることを禁ずる法が承認されねばならなかった。

日本の劇のなかで最も有名なあの忠臣蔵は四十七人の浪人（主人のない男たち）の物語であるが、忠臣蔵では劇の主人公たちが敵の首を切ったあと、「小躍りして喜ぶ。彼らが妻を見捨て、子供と別れ、そして父母を失ったのも、この首一つを見るためであつたからだ。何と今日はめでたい日か！ 彼らは頭を叩き、当たり散らす。皆、喜びの余り、涙で顔はくしゃくしゃだ」。私はこの劇を東京で見た。忠臣蔵は歌舞伎の出し物のなかでも最も人気があり、いつも大きな劇場が老若男女で一杯で、吐き気を催しかねないほどのリアリズムで描写される謹厳な殺害と自死を、称賛する声はやまない。

ハラキリの習慣はもともと首斬りが必要としたが、そのことを知る西洋人は少ない。死を命じられたサムライはただ小刀を腹部に突き刺しただけであつた。が、その瞬間、彼がこの時のために選んだ友人が彼の首を斬り落とした。そしてそれからその首は確かに切腹した証として然るべき役人のもとに届けられねばならなかった。

一八六八年（明治元年）にリーズデル卿というイギリス人がこのハラキリを観察している。それは、ある武士が外人居留地の攻撃を先導した罪を問われ、ハラキリを命じられた時のことであつた。この時、この犠牲者は気のいい切り込み以上のものを成し遂げたが、この出来事の終局は啓示的である。

左側の腰の上部に奥深く差し込むと、彼は短刀をゆつくりと右側にまで引つ張り、次いで傷口のなかで回してから僅かに上に切り上げた。この間、吐き気を催させるほどの痛ましい動きであつたが、彼の顔の筋肉は少しも動かなかつた。それから短刀を引き抜き、上体を前に曲げると、ぐつと首を伸ばした。初めて苦痛の表情が彼の顔を過ぎる。が、一言ももらさなかつた。その瞬間、介錯人（付き添って手伝う友人）が、彼の横で身を屈めて彼の一瞬一瞬を食い入るようにつめていたのが、彼の足元までサツと立ち上がるや、刀を再び宙に構えた。電光石火、ドシンというにぶい不快な音、ガラガラと崩れる上体。一撃のもと首はからだから切り落とされた。死の静寂が襲いくる。ただ眼前の動きのない塊からぞつと

する血の音がドクンドクンとするばかりであった。しかしちょっと前までは武士道の勇敢な人であったのだ。

それゆえ、かかる激痛をみずから我慢して互いに加え合う日本人がシナにおいて行動したように行動するのも、或いは自分たちのほかに大規模な首斬りの実践をほかでも進めたのも、不思議ではない。それは、祖先——しかもそう遠くはない祖先——が習慣としてきた戦闘法への先祖返りでしかなかった。

もう一つの心理学的な事態は、儀礼と制約と禁止と慣習に締め付けられた生活から突如^{とつぜん}数千人の兵士たちが解放されたことである。それは余りに突然であったから、無秩序となるのが落ちであった。というのは日本人は家庭生活では心身共に束縛されているからだ。高い生け垣に囲まれ、外部世界からは閉ざされて、小さな家の中に住んでいる。

あらゆる感情の表現は厳しく抑えられているが、ひとたび自制を失えば実に驚くべき感情の爆発となる。私はある学生を思い出す。その学生は隣の学生から明らかに写したため、その答案用紙を取り上げねばならなかった。彼は不当に激怒して立ち上がり、私に打ってかかってきたため、そ

れ以上悪くならないよう、数人の友人が彼を捕まえて教室から出すよりほかなかった。

日本人の習慣とも掟ともなっている丁重な行爲と言葉は、どんな不快さも表に出さない。しかしこの民族をよく知るものは、丁重な言動の下で彼らが憤怒^{ふんぬ}に煮えたぎっているのをよく感じたものだ。だからこそ、劇では、日本人は本当の自分をさらけ出す。俳優は大いに泣き、気違いのようにわめき立て、聴衆の興奮した感情に訴える。そして聴衆はそれを愛する。こういう風に自分でも実際に行動したいからなのだ。

そのうえ警察が日本人に「危険思想」を考えることを禁止する。日本人は（金持ちでさえ質素に暮らすほど）何であれ隣人より優ることを恐れる。そして大部分がよそ行きの改まった言葉遣いで自分の考えを絶えず述べて、激しい感情をむきだしにしないで抑える。それゆえどんなに制止されている人でも突如自分が自由であると分かると遠慮や気兼ねや慎みや自制心を全部放棄すると決心する、と思つてよい。

ここから最後の第七点目に導かれるのだが、ここが謎の全体に迫る核心点であると思う。

日本人は深遠な宗教作品を持たない。宗教的指導原理に最も近い古事記は国土と民族の神聖な起源を語ってはいるが、これは馬鹿げた神話で一杯であり、倫理的内容のない作品である。遙かに崇敬されているのは、多分、明治天皇の軍人勅諭や教育勅語であろう。二つともに忠誠、刻苦勉勵、服従を強いるだけだが、それなりに申し分ない。

人間の受難にかんする偉大で普遍的なドラマ、善と悪の角逐、人間の魂の本質、罪の問題と最後の審判の確実なこと、——こういった問題に日本人はまるで関心がなかったようだ。日本人の頭には家族と国家にたいする忠誠の義務しかない。彼らの精神は人間と人間の関係や人間を越えた神との関係に潜む精神的倫理的な本質と向き合う気にならないようである。シェイクスピアやミルトンは私たちの偉大な作家であり、悪と悲劇の問題と格闘するのにたいして、彼らの最大の作家は天皇の皇子の多面的な魅力を実に魅惑的に書いた女性（訳注、紫式部）である。

日本人の考えでは、神聖なる天皇の統治こそがあらゆる国民にとつての祝福であらうし、目的達成の手段を考慮することよりも重要であらうから、私たちの正義の観念、諸国民の道義という観念は日本人には全く意味をなさない。

だから日本の指導者たちが常に私たちにたいして東アジアにおける日本の真の意図を理解していない、日本は真に東洋に平和をもたらそうとしているのだと言う抗議——その言葉は私たちには滑稽に聞こえるが——その言葉に裏表はない。白鳥敏夫という日本政府の有力な指導者がシナ人に武器を置いて日本の保護を信賴するよう助言したとき、彼は大袈裟ではなく掛け値なしにそう評価されることを期待したのである。

勿論、西洋の教育を受け西洋の思想を身につけた進歩的な考えの日本人も多くいて、現在の事態の進展を良いとは少しも思わず、私がこれまで述べてきた精神的傾向には共感できないと言う人は多い。多くの兵士は目にした事態に疑いなくうんざりしている。しかし現在支配中の軍国主義者のグループは日本人の伝統を実によく理解しており、その利用の仕方を知っている。容易に喚起される大衆の感情に訴えられそうなアピール、——祖先の遣り方と国民の誇りにたいするアピールや、完全な軍事的勝利によつて国民の劣等感を決定的に拭い去るという約束が濫用されてきた。

勝利——または「ハラキリ」か

それゆえ日本人はかかる勝利を勝ち取るために悪鬼のように戦うと予想してよい。日本人はもし外国人が勝てば何をされるかも知れぬという恐れと誤報に駆り立てられて、死に物狂いで戦うであろう。日本人を背後から突き動かし、起きているのは日本人の人種的な背景であり、次の九つの要因であろう。

- (1) 家族と国家的忠誠に限定される道徳教育
- (2) 日本人を他の人間と区別し引き立てる独特な神聖観
- (3) 精神病的な劣等感
- (4) 個人主義にたいする憎悪と恐怖
- (5) 人命の有する価値の無視
- (6) 放埒な性行動
- (7) 首斬りという背景
- (8) 締め付けるような社会的制約からの解放
- (9) 崇敬にあたいするような倫理的精神的原則に基づく宗教作品の欠落

来年から再来年には私たちの義憤を刺激させる多くの残酷物語がある。親切で仕事熱心で、静かな家族生活以上のものは願わず、その美的感覚が尊敬に値するあの渡辺は、

私たちにはもう思い出せないかも知れない。軍国主義者が政府の手綱をとらないよう懸命に努力した数千人の日本人のことを私たちは忘れてよいかも知れない。しかし私たちが忘れてならないのは軍国主義者であって、彼らは戦争を起こして日本国民の原始的本能を解き放ち一〇〇〇年も退歩させたのである。もし軍国主義者が打倒されていたなら、日本文明の滓^{かす}が呼び起こされることは決してなかったであろう。

しかしひとたび連合国が持てる力の全てを感じさせるならば、現代世界にまで暗い影のように日本人に付きまとうあの劣等感はずっと大きくなる。私たちの勝利はどれも敏感な急所に食い込む。その最期は絶望的にして急速な——一種の国家のハラキリであると思う。

その最期に達したとき更に大きな問題が私たちを待ち受けている。日本はどう明日の世界を生きるのであるのか。そして今は世を忍んでいる自由主義的な指導者たちに、過去の原始的な怪獣が決して再び擡頭^{たいてう}しないよう建設する機会を保証するため、私たちには何ができるのであるのか。